

2023年12月

氷積の章

尾池和夫選

霞袂集

早稲一枚刈られて風の変りけり
虫の音や歩道の石に余熱なほ
鳥渡る漁へ出ぬ日も海を見て
防災の日や風呂敷の一包み
磯釣の影のぽつりと秋入日
断層に沿ひ山辺の道や秋

尾池葉子
大島幸男
原 稔
三和幸一
余米重則
伊藤武敏

氷凌集

台風は海より生まれ海に消ゆ
爽涼や鯨が空を飛ぶ話
新涼の嵯峨野あるけば池二つ
備蓄品すべて入れ替へ震災忌
満月の余香のごとき畳かな
匂ひ立つ角のするどき新豆腐

四宮陽一
大口彰子
重富國宏
南田美恵子
渋谷啓子
吉田恭子

2023年11月

氷積の章

尾池和夫選号

霞袂集

地形図を変へるほどなり秋出水
駅の巢の無住になりし今朝の秋
小走りの犬に声かけ夕端居
青柚子を採る半分は熟るるまで
数珠まはしに嬰のぐうの手地藏盆
大和絵の鹿歩きさう秋の晴

尾池葉子
大島幸男
余米重則
伊藤武敏
中嶋文子
古川邑秋

氷凌集

ロボットがツカレタと言ふ残暑かな
放哉の若き晩年夕立来る
水の残るグラスの指紋秋の声
手術後の肺へゆつくり今朝の秋
水替ふる玻璃の花瓶へ吾亦紅
聞きとれぬ防災無線秋の雨

渋谷啓子
重富國宏
大口彰子
佐藤美智子
四宮陽一
真下章子

2023年10月

氷積の章

動くとき刻崩すごと山椒魚
朝の日に羽化せぬひとつ蟬時雨
読経終へし僧侶に透ける汗手貫
入船に見上ぐる岬合歡の花
息継ぎに水面破れば雲の峰
炎昼や影と別れて堂の闇

尾池和夫選

2023年月号

霞袂集

尾池葉子
大島幸男
原 稔
岡橋啓二
余米重則
古川邑秋

氷凌集

賀茂茄子や由緒正しき畑の土
大樟の影なる茅の輪くぐりけり
絵日記のおほかた空よ立葵
徳兵衛が証文に泣く夏芝居
太陽の動かぬごととき大暑かな
雨降れば雨のひかりに鴨足草

重富國宏
吉田恭子
真下章子
四宮陽一
大口彰子
渋谷啓子

2023年9月

氷積の章

水に根の種はアボガド明易し
唐突の三角点や草いきれ
着いてすぐ灯を消す船や明易し
だしぬけに変わる調子や祭鉦
石灰を撒き紫陽花の濃紫
一旦は振り向く癖や青蜥蜴

尾池和夫選

霞袂集

尾池葉子
大島幸男
三和幸一
余米重則
伊藤武敏
古川邑秋

氷凌集

夏至の日や層入に折る包装紙
村人の好む旧道えごの花
風を呼び棚田一枚花かつみ
万太郎偲び浅草泥鰯鍋
烏除けの網の中にて枇杷を挽ぐ
木簡に薬酒の処方木下闇

大口彰子
真下章子
渋谷啓子
重富國宏
南田美恵子
木村静子

2023年8月

氷積の章

卷癖のもどらぬつよさ落し文
笹に汲むひと口ほどの石清水
行く春や木は集りて森を成す
縄文の土器出し辺り竹落葉
もこもこと山の膨らむ五月かな
カレー屋の仕込みの匂ひ夏近し

尾池和夫選

2023年8月号

霞袂集

尾池葉子
大島幸男
三和幸一
原 稔
岡橋啓二
余米重則

氷凌集

炙りたる大地の香り初鯉
家系図に終りを記す夏はじめ
閉山の廃村に山茂るなり
十葉のはびこる根津の裏長屋
ベランダの薔薇の香窓を通り来る
石楠花や噴火記録の標立つ

大口彰子
吉田恭子
羽鳥正子
重富國宏
四宮陽一
高橋千画子

2023年7月

氷積の章

比叡より都は見えぬ曇晦
みづうみの名の橋潜る蜷舟
みづうみへ出て散り散りに花筏
背を向けてゴリラ拗ねをる花の雨
極早生は四月の田植たなぐもり
野遊や仲間入りする風のあり

尾池和夫選

2023年7月号

霞袂集

尾池葉子
大島幸男
原 稔
余米重則
伊藤武敏
古川邑秋

氷凌集

甘茶蔓かかぐる僧や仏生会
山影の寺領に及ぶ竹の秋
春果てて塵外の寂戻りけり
覚醒と眠りの境朧月
野に戻る畑や残る葱坊主
枝先に鳴くカメレオン四月馬鹿

真下章子
渋谷啓子
重富國宏
四宮陽一
佐藤美智子
大口彰子

2023年6月

氷積の章

若布干す声は若布の向う側
花見えて鋤込まれたる紫雲英かな
みづうみの五つを後に鳥帰る
山里の暮残りたる辛夷かな
永き日や出展作にサイン入れ
裏庭より昼餉夕餉と露の臺

うすうすと光の香り紫木蓮
春の夜や静かに光る深海魚
小道具の白梅にほふ舞台裏
川分れ川合ふ中洲柳の芽
鶯の声に始まるきのふけふ
風船の空気噴射に飛びて落つ

2023年5月

氷積の章

田螺鳴く休耕の闇もて余し
稜線のやはらかくなる芽吹かな
露味噌の苦みに合はず地酒かな
切株に坐してゆるりと梅見かな
春障子猫の幅だけ開けてあり
雪虫や半鐘のこる山の村

霊薬の徐福と出逢ふ春の夢
全力を出し切る油断石鱈玉
浚渫に疏水片寄る二月かな
捨枝の花芽ふくらむ雨水かな
鬼老いて子鬼張り切る節分会
林檎畑続きここより木の根明く

2023年4月

尾池和夫選

2023年月号

霞袂集

尾池葉子
大島幸男
原 稔
岡橋啓二
余米重則
中嶋文子

氷凌集

大口彰子
四宮陽一
渋谷啓子
佐藤美智子
城島千鶴
益子桂子

尾池和夫選

霞袂集

尾池葉子
大島幸男
原 稔
岡橋啓二
余米重則
伊藤武敏

氷凌集

四宮陽一
大口彰子
城島千鶴
渋谷啓子
吉田恭子
高橋キセ子

氷積の章

尾池和夫選

霞袂集

ついと灯のゆらぐ淑気や一之宮
 起重機のミラーに揺るる注連飾
 水餅の生きもののごと水替へて
 越の酒細き雁木が屋根支ふ
 アンドロイド演ずる少女初芝居
 枯蓮や矢の痕残る勅使門

尾池葉子
 大島幸男
 原 稔
 余米重則
 中嶋文子
 古川邑秋

氷凌集

雪催人影淡き競馬場
 幼子のシャベル加はり雪を搔く
 身幅ほど通りへ雪を搔きにけり
 冬木の芽八分音符のごと風に
 寒椿京に果てたる会津武士
 蒼天の風なきひと日初浅間

四宮陽一
 羽鳥正子
 佐藤美智子
 大口彰子
 重富國宏
 真下章子

2023年3月

氷積の章

尾池和夫選

2023年3月号

霞袂集

紅葉濃しリハビリテーションの帰り
 柚子坊のきのふの枝にけふはみず
 雪雲のきつぱり切るるくにざかひ
 とぶ鳥も追はるる鳥も十二月
 狐火や焼討ちされし寺の跡
 湯豆腐を貫通したるニュートリノ

友永美代子
 尾池葉子
 大島幸男
 三和幸一
 原 稔
 余米重則

氷凌集

城山へ噴煙渡る冬の湾
 家系図の和綴緩びぬ冬の月
 職人の符丁ちひさき障子かな
 寒施行見馴れぬ鳥を客として
 谷川岳今日も荒れをり根深汁
 繕ひに指貫落つる霜夜かな

四宮陽一
 吉田恭子
 羽鳥正子
 高橋千画子
 佐藤美智子
 大口彰子

2023年2月

氷積の章

尾池和夫選

浮雲の冬めくはやさ比良比叡
あやふきは冬の真昼の透ける月
行く春の暗峠越えにけり
落葉舞ひ一葉一葉の宴かな
寒き夜や定義の多き数学書
赤鬼の指めく軒の唐辛子

霞袂集
尾池葉子
大島幸男
三和幸一
原 稔
余米重則
伊藤武敏

波郷忌の風や高みの莢の鳴る
冬耕や眠りし蛙起しもす
山眠る利根の川音細くなり
皆既食見納めの月仰ぎけり
冬めくや枯山水の陰と陽
冬の日や小栗判官蘇生の湯

氷凌集
佐藤美智子
酒井富子
渋谷啓子
中野 梓
重富國宏
四宮陽一

2023年1月

氷積の章

尾池和夫選

いちにちの端つこにして虫の闇
稲刈機かへりはいとも軽やかに
木犀の香より始まる一日かな
秋期満つコントラバスの音の波
秋声やコントラバスの横たはる
秋澄むや茶筌の里のよきかをり

霞袂集
尾池葉子
三和幸一
岡橋啓二
伊藤武敏
中嶋文子
古川邑秋

声高の白黒映画秋の夜に
藤袴染屋に古きままの井戸
天高し畝一本に鋤をふる
泥団子木の葉に並べ秋真昼
河豚の子の海中に群れ秋うらら
教会の鐘の音はるか秋の昼

氷凌集
大口彰子
佐藤美智子
吉田多々詩
益子桂子
城島千鶴
渋谷啓子